

予防接種のてびき

すこやか健康センター内 福祉課保健係

(平成25年4月 改訂版)

予防接種を受けましょう！

お母さんが赤ちゃんにプレゼントした病気に対する抵抗力（免疫）は、百日せきや水痘（みずぼうそう）では生後3ヶ月までに、麻しん（はしか）やおたふくかぜでは生後12ヶ月にはほとんどが自然に失われていきます。この時期を過ぎますと、赤ちゃん自身で免疫をつくって病気を予防する必要があります。これに役立つのが予防接種です。

子どもは発育と共に外出の機会が多くなります。保育園や幼稚園に入るまでには、できるものには予防接種で免疫をつけ、感染症にかからないように、また他の人にうつさないようためにも予防しましょう。

目次

1	予防接種の対象となる病気とワクチンの副反応	
	ポリオ	3
	三種混合	4
	麻しん（はしか）・風しん	6
	日本脳炎	8
	結核（BCG）	9
	四種混合	10
	Hib（ヒブ）	12
	肺炎球菌	14
2	違うワクチンを接種する場合の間隔	16
3	予防接種を受けに行く前に	17
4	副反応がおこった場合の対応	21
5	予防接種法による健康被害救済制度	22
6	その他	23

ポリオ（急性灰白髄炎）

日本でも1960年代前半までは流行を繰り返していましたが、現在は予防接種の効果で国内での自然感染は報告されていません。しかし、今でもパキスタン、アフガニスタン、ナイジェリアなどで今もポリオの流行がありますからこれらの地域で日本人がポリオに感染したり、日本にポリオウイルスが入ってくる可能性があります。予防接種を受けない人が増え、免疫を持たない人が増えると、持ち込まれたポリオウイルスは免疫を持たない人から持たない人へと感染し、ポリオの流行が起こる可能性があります。

ポリオワクチンを接種することがポリオを予防する第一の方法です。

<接種について>

以前は経口接種(口から飲む)生ポリオワクチンでしたが、平成24年9月1日より不活化ポリオ(皮下接種)が導入されています。不活化ポリオワクチンはポリオウイルスを不活化し(殺し)、免疫をつくるのに必要な成分を取り出して病原性をなくして作ったもので、ウイルスとしての働きはないのでポリオと同様の症状が出るという副反応はありません。

<副反応>

重大な副反応としてショック、アナフィラキシー様症状、けいれんがあらわれることがあります。また、接種部位の疼痛、赤みや腫れ、発熱、傾眠状態、易刺激性、食欲不振なども報告されています。多くの場合は接種部位の赤みや腫れは3～4日で消失、発熱は1～2日で下がる人が多いです。

三種混合【ジフテリア (D)・百日せき (P)・破傷風 (T)】

●ジフテリア (Diphtheria)

ジフテリアはジフテリア菌の飛沫感染で起こります。症状は高熱、のどの痛み、犬吠のようなせき、嘔吐(おうと)などで、呼吸困難を引き起こし、窒息することがある恐ろしい病気です。また、発症した2~3週間後には菌から出る毒素によって心筋障害や神経麻痺を起こすことがあります。国内ではほとんど発症をみていませんが、最近ロシアで流行がありました。予防接種を続けないと日本でもふたたび流行する可能性があります。

●百日せき (Pertussis)

百日せきは百日せき菌の飛沫感染で起こります。症状は普通の風邪のような症状で始まり、しだいにせきがひどくなり、顔を真っ赤にして連続的にせきこむようになります。せきのあと急に息を吸い込むので、笛を吹くような音が出ます。熱は通常出ませんが、せきで呼吸ができず、けいれんを起こすこともあります。肺炎や脳症など重い合併症をおこし、乳児では命を落とすこともあります。

●破傷風 (Tetanus)

破傷風菌は人から人へ感染するのではなく、土の中にひそんでいて、傷口から人へ感染します(傷口が小さくても危険)。菌が体の中で増えると、菌の出す毒素のために口が開かなくなったり、けいれんをおこしたり、死亡することもあります。

予防はワクチンが最も有効ですので、早めに予防接種を受けて免疫をつけることが大切です。

三種混合【ジフテリア (D) ・百日せき (P) ・破傷風 (T) 】

<接種について>

三種混合予防接種には混合ワクチンとよばれる百日せきとジフテリア、破傷風ウィルスを混合したワクチンを使います(添加物であるゼラチンは含まれていませんのでゼラチンアレルギーの心配はありません)。

<副反応>

注射部位の発赤(ほっせき)、腫脹(はれ)、硬結(しこり)などの局所反応が主です。特に過敏な子ではひじをこえて上腕全体がはれた例が少数あります。

重い副反応はなくても、機嫌が悪くなったり、はれが目立つときなどは医師のご相談ください。

麻しん（はしか）・風しん

●麻しん（はしか）

麻しんウイルスの空気感染によって起こる病気で、感染力が強く、予防接種を受けないと多くの人がかかる病気です。発熱、せき、鼻汁、めやに、発疹を主症状とします。最初3～4日間は38℃前後の熱で、一時おさまりかけたかと思うとまた39～40℃の高熱と発疹が出てきます。高熱は3～4日で解熱し、次第に発疹も消失します。

主な合併症としては、気管支炎、肺炎、中耳炎、脳炎があります。

●風しん

風しんウイルスの飛沫感染によって起こります。軽い風邪症状ではじまり、発疹、発熱、後頸部リンパ節腫脹などが主症状です。発疹も熱も約3日間で治るので「三日ばしか」とも呼ばれることがあります。妊婦が妊娠早期にかかると、先天性風しん症候群と呼ばれる病気により心臓病、白内障、聴力障害などの障害を持った児が生まれる可能性が高くなります。

妊娠時の風しん感染を防ぐためにも、皆が予防接種を受けて免疫をつけておくことが大切です。

麻しん（はしか）・風しん

<接種について>

麻しんウイルス及び風しんウイルスを弱毒化してつくったワクチンを接種します。麻しんと風しんの対策を強化するために、2回接種が導入されています。

<副反応>

副反応の主なものは、発熱と発疹です。これらの症状は接種後4～14日に多く出ます。なお、接種直後から数日中に過敏症状と考えられる発熱、発疹が出るがありますが、1～3日で治ります。

これまでの麻しんワクチン、風しんワクチンの副反応のデータからアナフィラキシー、血小板減少性紫斑病、脳炎、けいれんなどの副反応が、まれに生じる可能性もあります。

日本脳炎

※ 北海道在住者は対象にならず、接種する必要はありません。

ヒトから直接ではなくブタの中で増えたウィルスが蚊（カ）によって媒介されうつります。7～10日の潜伏期間の後、高熱、頭痛、嘔吐（おうと）、意識障害、けいれんなどの症状を示す急性脳炎になります。流行は西日本地域が中心ですが、ウィルスは北海道など一部を除く日本全体に分布しています。

＜日本脳炎ワクチン（不活化ワクチン）＞

北海道を除く日本全国には日本脳炎ウィルスに感染したブタとウィルスを運ぶ蚊（コガタアカイエカ）がたくさんいます。3歳を過ぎたら受けましょう。

区分	対象年齢	標準的な接種年齢	回数	接種間隔
1期初回	生後6ヶ月～90月未満	3歳に達した時から 4歳に達するまでの期間	2回	1～4週
1期追加	生後6ヶ月～90月未満 ※ 1期初回（2回）終了後 概ね1年おく。	4歳に達した時から 5歳に達するまでの期間	1回	
2期	9～13歳未満	9歳に達した時から 10歳に達するまでの期間	1回	

結核

結核は結核菌の感染で起こります。日本の結核患者はかなり減少しましたが、まだ、3万人近い患者が毎年発生しているため、大人から子どもへ感染することも少なくありません。また、結核に対する抵抗力（免疫）はお母さんからもらうことができませんので、生まれたばかりの赤ちゃんもかかる心配があります。

乳幼児は結核に対する抵抗力が弱いので、全身性の結核症にかかったり、結核性髄膜炎になることもあり、重い後遺症を残す可能性があります。

<接種について>

BCGは管針法といって「スタンプ方式」で上腕の2ヶ所に押しつけて接種します。接種した場所は乾燥する必要があります。約10分～15分程度で乾きます。

<副反応>

接種後10日頃に接種局所に赤いポツポツができ一部に小さくうみができることがあります。この反応は接種後4週間頃に最も強くなりますが、その後はかさぶたができて接種後3ヶ月までにはなおります。これは異常反応ではなく、BCG接種により抵抗力がついた証拠です。バンソウコウをはったりしないでそのまま清潔を保ってください。ただし、接種後3ヶ月を過ぎても接種のあとがジクジクしているようなときは医師に相談してください。

四種混合(百日せき・ジフテリア・破傷風・不活化ポリオ)

●ジフテリア

ジフテリアはジフテリア菌の飛沫感染で起こります。症状は高熱、のどの痛み、犬吠のようなせき、嘔吐(おうと)などで、呼吸困難を引き起こし、窒息することがある恐ろしい病気です。また、発症した2~3週間後には菌から出る毒素によって心筋障害や神経麻痺を起こすことがあります。国内ではほとんど発症をみていませんが、最近ロシアで流行がありました。予防接種を続けないと日本でもふたたび流行する可能性があります。

●百日せき

百日せきは百日せき菌の飛沫感染で起こります。症状は普通の風邪のような症状で始まり、しだいにせきがひどくなり、顔を真っ赤にして連続的にせきこむようになります。せきのあと急に息を吸い込むので、笛を吹くような音が出ます。熱は通常出ませんが、せきで呼吸ができず、けいれんを起こすこともあります。肺炎や脳症など重い合併症をおこし、乳児では命を落とすこともあります。

●破傷風

破傷風菌は人から人へ感染するのではなく、土の中にひそんでいて、傷口から人へ感染します(傷口が小さくても危険)。菌が体の中で増えると、菌の出す毒素のために口が開かなくなったり、けいれんをおこしたり、死亡することもあります。予防はワクチンが最も有効ですので、早めに予防接種を受けて免疫をつけることが大切です。

●不活化ポリオ

日本でも1960年代前半までは流行を繰り返していましたが、現在は予防接種の効果で国内での自然感染は報告されていません。しかし、今でもパキスタン、アフガニスタン、ナイジェリアなどで今もポリオの流行がありますからこれらの地域で日本人がポリオに感染したり、日本にポリオウィルスが入ってくる可能性があります。予防接種を受けない人が増え、免疫を持たない人が増えると、持ち込まれたポリオウィルスは免疫を持たない人から持たない人へと感染し、ポリオの流行が起こる可能性があります。

ポリオワクチンを接種することがポリオを予防する第一の方法です。

四種混合(百日せき・ジフテリア・破傷風・不活化ポリオ)

<接種について>

四種混合予防接種には、混合ワクチンとよばれる百日せきとジフテリア、破傷風ウイルス、ポリオを混合したワクチンを皮下に注射します。

<副反応>

注射部位の紅斑（赤み）、腫脹（はれ）、硬結（しこり）などの局所反応が主です。発熱、気分変化、下痢、鼻漏、咳嗽（せき）、発疹、食欲減退、咽頭紅斑、嘔吐などが見られることもあります。重い副反応としてはまれにショック、アナフィラキシー様症状、血小板減少性紫斑病、脳症、けいれんがあります。

重い副反応はなくても、機嫌が悪くなったり、はれが目立つときなどは医師にご相談ください。

Hib(ヒブ)

脳や脊髄を包んでいる膜を髄膜といい、この髄膜に細菌やウイルスが感染して炎症が起こる病気が「髄膜炎」です。「髄膜炎」には、細菌が原因の「細菌性髄膜炎」と細菌以外(ウイルスなど)が原因の「無菌性髄膜炎」があります。

治療後の経過が悪く後遺症が残るなどのため特に問題となるのが「細菌性髄膜炎」です。乳幼児の「細菌性髄膜炎」を起こす細菌はいくつかあり、原因菌の半分以上を占めているのが「インフルエンザ菌b型」という細菌で、略して「Hib(ヒブ)」と呼ばれています。

Hib(ヒブ)による細菌性髄膜炎(Hib(ヒブ)髄膜炎)は、5歳未満の乳幼児がかかりやすく、特に生後3ヶ月から2歳になるまではかかりやすいので注意が必要です。

日本の年間患者数は少なくとも600人と報告されており、5歳になるまでに約2,000人に1人の乳幼児がHib(ヒブ)髄膜炎にかかっていることとなります。

Hib(ヒブ)髄膜炎にかかると1ヶ月程度の入院と抗生物質による治療が必要となります。適切な治療を受けても約5%(年間約30人)の乳幼児が死亡し、約25%(年間約150人)に知的障害や聴力障害、てんかんなどの後遺症が残ります。さらに最近では抗生物質の効かない菌(耐性菌)も増えてきており、治療が困難な人が増えています。

Hib(ヒブ)

<接種について>

Hibワクチンは、製造の初期段階に、ウシの成分(フランス産ウシの肝臓および肺由来成分、ヨーロッパ産ウシの乳由来成分、米国産ウシの血液および心臓由来成分)が使用されており、その後の精製工程を経て製品化されています。このワクチンはすでに世界100カ国以上で使用されており、発売開始からの14年間に約1億5000万回接種されていますが、このワクチンの接種が原因でTSE(伝達性海綿状脳症)にかかったという報告は1例もありません。理論上TSE感染がおこる可能性は完全に否定できないものの、このワクチンを接種された人がTSEに感染する危険性はほとんどないものと考えられています。Hib(ヒブ)ワクチンは、推奨される方法で接種を受けた人のほぼ100%に抗体(免疫)ができ、Hib(ヒブ)感染症に対する高い予防効果が認められています。

<副反応>

Hib(ヒブ)ワクチンの接種後に、他のワクチン接種でもみられるのと同様の副反応がみられますが、通常は一時的なもので数日で消失します。最も多くみられるのは接種部位の発赤(赤み)や腫張(はれ)です。また発熱が接種された人の数%におこります。非常にまれですが、海外で次のような重大な副反応が報告されています。

- (1) ショック・アナフィラキシー様症状(じんましん・呼吸困難など)
- (2) けいれん(熱性けいれん含む)
- (3) 血小板減少性紫斑病

小児肺炎球菌

肺炎球菌は、乳幼児の鼻や咽頭に定着する常在菌で、小児の細菌感染症の主要な原因菌です。

肺炎球菌が原因となっておこる主な疾患は、中耳炎31.7%、菌血症72%、細菌性髄膜炎19.5%などですが、本来無菌であるべき部位（血液、髄液など）から菌が検出される状態である侵襲性肺炎球菌感染症（IPD）といわれる髄膜炎、敗血症、重症の肺炎などをおこすことが特に問題とされます。

肺炎球菌感染症（IPD）は5歳未満に多くみられ、2歳未満の乳幼児では特に重くなりやすく、死亡したり、後遺症を残す可能性があります。

小児肺炎球菌

<接種について>

肺炎球菌は分類すると90種類以上ありますが、このワクチンは、侵襲性肺炎球菌感染症(IPD)の原因菌として特に頻度の高い7種類に有効で、重い感染症を予防する効果があります。 ※平成25年11月より13種類の菌に有効なワクチンに変更になりました。

<副反応>

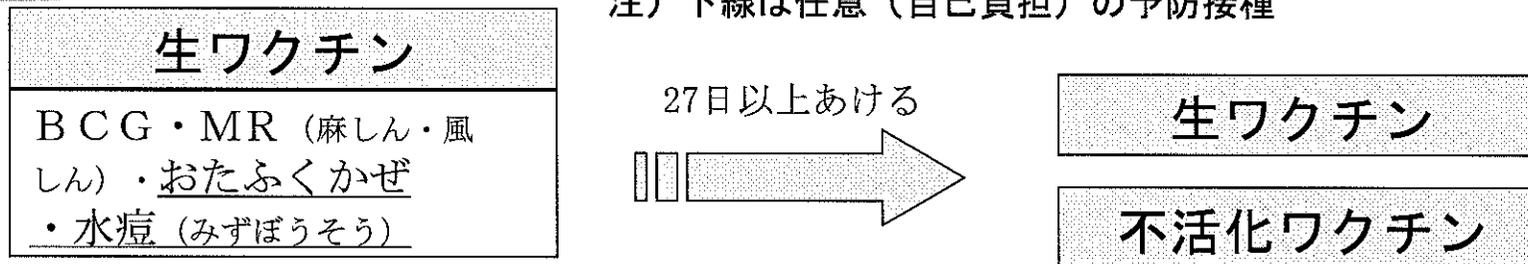
小児用肺炎球菌ワクチンの国内臨床試験でみられた副反応は、注射部位の症状(赤み、硬結、腫れ、痛みなど)、発熱(37.5℃以上)など一時的な症状です。非常にまれですが、海外で次のような副反応が報告されています。

- (1) ショック、アナフィラキシー様反応(通常接種後30分以内に出現する呼吸困難や全身性のじんましんなどを伴う重いアレルギー反応のこと)
- (2) けいれんこのような症状が疑われた場合は、すぐに医師に申し出てください。

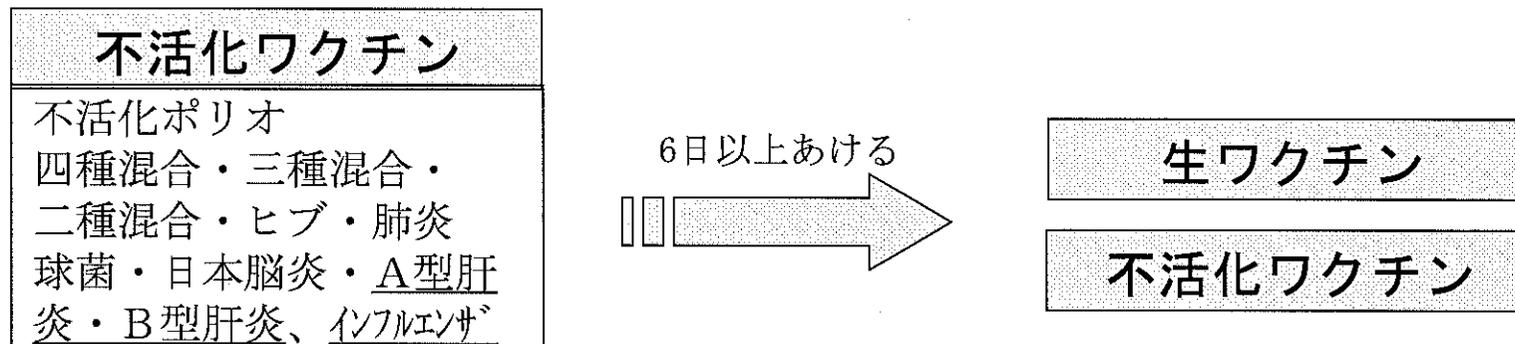
場合によっては重症化したり、後遺症を残したり、生命を脅かすことがあります。

違う種類のワクチンを接種する場合の間隔

注) 下線は任意（自己負担）の予防接種



生ワクチンを接種した日から、次の接種を行う日までの間隔は、27日間以上おく。



不活化ワクチンを接種した日から、次の接種を行う日までの間隔は、6日間以上おく。

※異なった種類のワクチンを特に急いで接種する必要がある場合は、医師にご相談ください。なお、同じ種類のワクチンを複数回接種する場合には、それぞれ定められた間隔がありますので、間違えないようにしてください。

予防接種を受けに行く前に

(1) 一般的注意事項

予防接種は体調のよい時に受けるのが原則です。日頃から保護者の方はお子さんの体質、体調など健康状態によく気を配ってください。そして何か気にかかることがあれば、あらかじめかかりつけの医師もしくはすこやか健康センターにご相談ください。安全に予防接種を受けられるよう、保護者のみなさんは以下の注意の上、当日に予防接種を受けるかどうか判断してください。

- (1) 当日は朝から子どもの状態をよく観察し、ふだんと変わったところのないことを確認してください。接種に連れていく予定をしていますが、体調が悪く思ったら医師に相談の上、接種をするかどうか判断しましょう。
- (2) 受ける予定の予防接種について、通知やパンフレットをよく読んで、必要性や副反応についてよく理解しましょう。わからないことは会場で接種を受ける前に接種医に質問しましょう。
- (3) 母子健康手帳は必ず持っていきましょう。
- (4) 予診票は子どもを診て接種する医師への大切な情報です。責任をもって記入するようにしましょう。
- (5) 接種を受ける子どもの日ごろの状態をよく知っている保護者の方が連れていきましょう。
なお、予防接種の効果や副反応などについて理解した上で、接種に同意したときに限り、接種が行われます。

(2) 予防接種を受けることができない人

(1) 明らかに発熱をしているお子さん

注) 一般的に、熱のある人とは、測定した体温が37.5℃以上の場合をさします。

(2) 重篤な急性疾患にかかっていることが明らかなお子さん

急性で重症な病気で薬を飲む必要のあるお子さんは、その後の病気の変化もわかりませんので、その日は見合わせるのが原則です。

(3) その日に受ける予防接種の接種液に含まれる成分で、アナフィラキシーを起こしたことがあることが明らかなお子さん

注) 「アナフィラキシー」というのは通常接種後30分以内に起こるひどいアレルギー反応のことです。汗がたくさん出る、顔が急に腫れる、全身にひどいじんましんが出るほか、はきけ、嘔吐(おうと)、声が出にくい、息が苦しいなどの症状に続きショック状態になるようなはげしい全身反応のことです。

(4) BCG接種の場合においては、予防接種、外傷等によるケロイドが認められるお子さん

(5) 予防接種を受けようとする病気に既にかかったことがあるお子さん。または現在かかっているお子さん。

(6) その他、医師が不適当な状態と判断した場合

上の①～④に当てはまらなくても医師が接種が不適当と判断した時は接種できません。

(3) 予防接種を受ける際に注意を要するお子さん

以下に該当すると思われる保護者は、主治医がいる場合には必ず前もって診てもらい、予防接種を受けるかどうかをご判断してもらいましょう。受ける場合にはその医師のところで受けるか、あるいは診断書又は意見書をもらってから予防接種を受けるようにしてください。

- (1) 心臓病、腎臓病、肝臓病、血液の病気や発育障害などで治療を受けているお子さん
- (2) 前に予防接種を受けたとき、2日以内に発熱のみられたお子さん及び発疹、じんましんなどアレルギーと思われる異常がみられたお子さん
- (3) 過去にけいれん（ひきつけ）を起こしたことがあるお子さん
けいれんの起こった年齢、そのとき熱があったか、熱がなかったか、その後起こっているか、受けるワクチンの種類は何かなどで条件が異なります。必ずかかりつけの医師と事前によく相談しましょう。原因がはっきりしている場合には、一定期間たてば接種できます。
- (4) 過去に免疫不全の診断がされているお子さん及び近親者に先天性免疫不全症の人がいるお子さん
- (5) ワクチンにはその製造過程における培養に使う卵の成分、抗生物質、安定剤などが入っているものもあるので、これらにアレルギーがあるといわれたことのあるお子さん
- (6) BCG接種の場合においては、家族に結核患者がいて長期間に接触があった場合など、過去に結核に感染している疑いのあるお子さん

(4) 予防接種を受けた後の一般的注意事項

- (1) 予防接種を受けたあと30分間は、接種会場でお子さんの様子を観察するか、医師とすぐに連絡をとれるようにしておきましょう。急な副反応はこの間に起こることがあります。
- (2) 接種後、生ワクチンでは4週間、不活化ワクチンでは1週間は副反応の出現に注意しましょう。
- (3) 接種部位は清潔に保ちましょう。入浴は差し支えありませんがわざと注射した部位をこすることはやめましょう。
- (4) 接種当日は、はげしい運動はさけましょう。
- (5) 接種後、接種部位の異常な反応や体調の変化があった場合は、速やかに医師の診察を受けましょう。



副反応がおこった場合の対応

【副反応が起こった場合】

通常みられる反応については3ページ以降の各病気の「ワクチンの副反応」を参照ください。通常、数日以内に自然に治るので心配は不要です。接種局所のひどいはれ、高熱、ひきつけなど重い副反応の症状があったら、医師の診察を受けてください。お子さんの症状が予防接種後副反応報告基準に該当する場合は、医師から市町村長へ副反応の報告がされます。特に症状の強い時は、すこやか健康センターへご連絡ください。

ワクチンの種類によって極めてまれ（百万から数百万人に1人程度）に肺炎や神経障害などの重い副反応が生じることもあります。このような場合に厚生労働省が予防接種法に基づく定期の予防接種によるものと認定したときは、予防接種法に基づく健康被害救済の給付の対象となります。

（参考）

予防接種を受けたしばらく後に、何らかの症状が出現すれば、予防接種が原因でないかと疑われることがあります。しかし、よく検査をすると、たまたま同じ時期に発症した他の感染症などが原因であることが明らかになることもあります。これを「まぎれこみ反応」といいます。

予防接種法による健康被害救済制度

- (1) 定期の予防接種によって引き起こされた副反応により、医療機関での治療が必要になったり、生活に支障がでるような障害を残すほどの健康被害が生じた場合には、予防接種法に基づく給付を受けることができます。
- (2) 健康被害の程度等に応じて、医療費、医療手当、障害児養育年金、障害年金、死亡一時金、葬祭料の区分があり、法律で定められた金額が支給されます。死亡一時金、葬祭料以外については、治療が終了する又は障害が治癒する期間まで支給されます。
- (3) ただし、その健康被害が予防接種によって引き起こされたものか、別の要因（予防接種をする前あるいは後に紛れ込んだ感染症あるいは別の要因等）によるものなのかの因果関係を予防接種・感染症医療・法律等、各分野の専門家からなる国の審査会にて審議し予防接種によるものと認定された場合に給付を受けることができます。
- (4) 定期の予防接種として定められた期間を外れて接種を希望する場合、予防接種法に基づかない接種（任意接種）として取り扱われます。その接種で健康被害を受けた場合は、独立行政法人医薬品医療機器総合機構法に基づく救済を受けることとなりますが、予防接種法に比べて救済の額が2分の1となっております。

※給付申請の必要が生じた場合は保健所やすこやか健康センターへご相談ください。

その他

【予防接種の通知について】

法律に基づく定期の予防接種は、市町村が行うことになっており、保護者の方へのお知らせは個人通知や広報、町ホームページ等でお知らせしています。この通知等は、住民基本台帳及び外国人登録台帳に基づいて行いますので、赤ちゃんが生まれた時、転居した時には必ず届出をしましょう。

【実施時期について】

予防接種には病気ごとにそれぞれ接種に適した時期があります。標準的な接種期間に受けてください。

【お問い合わせ先】

すこやか健康センター内 役場 福祉課保健係

TEL 0164-62-6020 FAX 0164-69-2040

E-mail fukushi@town.haboro.lg.jp